

「脳卒中発症患者における運転の可否の要素は何か、ドライブシュミレーターを用いて」

【研究の目的・意義】

自動車運転において、脳卒中患者やてんかん患者では、公安でも診断書を提出し運転の継続可否が判断されることがしばしばある。これまでも、ドライブシュミレーターが運転のリハビリテーションや運転の可否の一助となっている論文の報告は複数認めている。

当院でも急性期病棟及び回復期病棟を同院内に認めており、脳卒中患者にドライブシュミレーターを用いた評価を積極的に行っている。当院におけるドライブシュミレーターは三菱プレシジョン株式会社の運転操作能力検査用シュミレータDS-7000Rであり、当院導入時には西日本に1機しかない性能の高いドライブシュミレーターである。公共交通機関より車社会である熊本県においては、自動車運転が可能かどうかについては生活の質に重要な問題であり、より正確な判断が求められる。2019年度から一次脳卒中センターを取得している当院は脳卒中患者が増加しており、それに伴い脳卒中患者における運転の可否を求められる症例も増加しつつある。本研究では、脳卒中患者における、運転の可否について、ドライブシュミレーターにおける評価項目や一般認知機能検査、神経学的評価などとの関連性を評価し、こういった要素が運転にかかわってくるかの評価することがより正確に運転再開の可否の判断が可能かを明らかにすることである。

【研究の方法】

(1) 研究の種類・デザイン

単施設前向き及び後ろ向き観察研究

杉村病院に入院した脳卒中の症例において、ドライブシュミレーターにおける評価を行っているものを登録する。患者情報に関しては、入院前の状態や基礎疾患などの患者背景、NIHSSやMESE、MOCA-Jを初めとした神経学的スコア、運転評価にかかわる各種検査項目、発症後の経過、治療経過および必要に応じて退院時と3か月後の患者予後の転帰調査を行う。これらについては、一般的なりスク管理、基礎疾患の状態や合併症の有無など患者の状態に応じて項目の抽出は判断され、本研究の参加の有無に治療方針は左右されない。研究担当者は、担当者に特定の方法を勧めることはなく、必要に応じてその時点で最善と思われる方針について助言をする。

(2) 研究対象者

① 予定症例数及びその設定根拠

〈予定症例数〉

約200症例

② 対象者

研究施設にてドライブシュミレーターを施行した連続症例とする。

③ 除外基準

評価が不十分であった患者。

もともと運転していなかった評価した患者、本研究への登録に同意を得られなかった患者。

【研究の期間】

2020 年 1 月 1 日から 2026 年 3 月 31 日まで